

筑波大学大学院体育の現状について

松元 剛, 山田幸雄

The physical education class for graduat students in University of Tsukuba

Tsuyoshi MATSUMOTO, Yukio YAMADA

1. 大学院体育の経緯

平成11年3月に、大学改革担当副学長による「平成10年度大学改革委員会報告—具体的改革への提言—」が公表された。この提言には、本学が大学院を中心とする教育研究体制へ移行するための組織改革、及び情報環境のあり方について審議したことが述べられ、さらに、本学の特色ある教育体制の充実のための方策として、体育教育の充実を挙げたことが述べられている。すなわち、「体育教育及びスポーツ活動を、本学が持つ物的・人的資源を活用して、筑波大学の大きな特色とするために以下の提言をする」というものであった。

1 体育教育の拡充について

本学の大学院生数の増加、大学院生の体力の低下傾向を考えると、大学院生の体育教育の必要性が高まっているといえる。大学院生が履修しやすい時間帯に〈スポーツ実技〉〈身体運動の科学〉に関する授業を、大学院の科目として開設する (Academic Sports Program)。学類においては、自由科目「体育」の単位を卒業要件単位に認定していない5学群・学類に対しての改善を求める。

2 スポーツ学習機会の増大について

学内のスポーツ活動の促進のために、体育・スポーツ施設を段階的に整備・改修し (Sports Facilities Improvement Scheme 構想)、スポーツ・体力づくり教室や公開講座を一層充実させる。

3 課外活動のパフォーマンスの向上について

スポーツ課外活動に対する応援、支援体制を強化し、レベルの高いゲームを学内施設においても観戦できる機会を増やす。

上記の提言を受けて、体育センターでは、大学院生のバランスのとれたキャンパス・ライフの形成を図る事を目的として、スポーツ機会を提供するプログラム、すなわち大学院生向けの体育授業を平成12年度より開設することとなった。開設にあたっては大学院生が履修しやすい時間帯である火曜日・金曜日の4～5時限に、スポーツ種目を主体とする科目を設置した。なお、開設形態は学則第68条を受けて、学群の科目として開設となる。表1に平成12年度における開設科目と受講人数 (オリエンテーション時) を示した。

2. 大学院体育の現状

平成12年11月に、教育審議会会長等から体

表1. 平成12年度開設科目と受講者数(オリエンテーション時)

開設科目名	受講者数(H12.5.16)
テニス	131
バドミントン	75
水泳	80
ジョギング	29
バスケットボール	76
バレーボール	50
合計	441

育センター長への大学院体育に関する連絡として、「大学院課程における体育教育に関する大学院としての対応について」の検討結果、および「大学院課程における体育教育の導入について」の主な意見・理由が提示された。それによると、修士課程としての統一的対応方法は決定していないが、平成12年度と同様に大学院生向けの体育の科目を学群で開講されるシステムに準ずる形として、平成13年度以降も試行的に継続されることが要望された。なお研究科の開設科目としての開講を希望する研究科については、実施する方向で関係組織と協議しながら検討を進めるべきであるとも述べられている。また博士課程委員会及び大研究科においては、同研究科の開講科目として

は開設しないこととし、なお、学群において開講する体育の科目を受講できるというシステムに準ずる形で維持できるのであれば、平成12年度と同様に対応したいとのことであった。

したがって上記の内容を受けて、体育センターでは平成13、14、15年度の大学院体育に関しても、平成12年度と同じ開設形態で行うこととなった。(表2)

3. 大学院体育のアンケート結果

更なる大学院体育の充実のために、平成14年度および15年度の受講生を対象に、大学院体育に関するアンケート調査をそれぞれ2学期に授業担当教官に依頼し、86名の大学院生から回答が集まった。以下、その結果を報告する。

1) 大学院体育の目的について(表3)

大学院体育を行う目的は、「体力維持・向上」や「心身のリフレッシュ」、「健康のため」が最も多く、いずれも体力・健康問題を意識していることが分かる。

2) 開設形態について

現在の開設曜日および講時については、「適切である」との回答が、全体の約9割をそれぞれ占めていた。

表2. 平成13～15年度開設科目と受講者数(オリエンテーション時)

授業科目名	受講人数(H13.4.10)	受講人数(H14.4.9)	受講人数(H15.4.8)
テニス	87	74	不開講
バドミントン	48	43	79
水泳	66	54	42
ソフトボール	41	34	29
つくばマラソン	33	32	39
バスケットボール	35	54	43
バレーボール	42	不開講	不開講
合計	352	291	232

表3. 大学院体育を行う目的

体力維持・向上	74%
心身のリフレッシュ	65%
健康のため	64%
スポーツが好きだから	55%
友達作り	25%
スポーツの技術を身に付けるため	22%
スポーツに関する知識を付けるため	18%
将来、指導者になりたいから	9%

3) 使用施設および用具等について

開設クラスで使用している施設および用具等に関して、「適切である」が88%と最も高く、体育施設に関する満足度が高いことが推測される。

4) 大学院体育の必要性について

大学院体育の必要性について尋ねたところ、回答者の91%が「その必要性を感じている」と報告していた。

5) 大学院体育の再受講について

回答者の88%が、「大学院体育を再度受講したい」と希望していた。

6) 大学院体育への関心について

「大学院体育に関心がある」との回答が、全体の93%を占めていた。

今回の調査では、多くの受講生が大学院体育についての感心が高く、その必要性も強く感じており、総じて大学院体育の開設に関して肯定的に捕らえていることが分かった。しかし、アンケートの回収率が極めて低く、大学院体育を出席し続けている学生からの回答が多いことから、今回の結果が一概にすべての受講生を反映していないことも予想される。アンケート調査の実施時期等を考慮し、再調査の必要性は感じるところである。

一方、授業の現状として、2学期の中盤よ

り極端に出席率が低くなっている問題がある。これは、現状の開設形態システムが通年の実技授業として行われるため、修士論文や博士論文といった大学院生の研究活動との兼ね合いが原因で、出席率の低下につながっていることが考えられる。したがって今後、開設形態システムの改善等に向けた体育センターとしての取り組みは必要である。

また、回答者の多くは、大学院体育の受講目的について体力・健康問題を意識していることが分かった。これまでも大学生や大学院生の体力低下問題は報告されており¹⁾²⁾、大学院生に対する運動やスポーツを実践することへの動機付けを行うことは必要である。すなわち、大学院には、国際的な競争力に耐えうるだけの優秀な研究者や高度職業人を輩出していくことが求められており、そのためにも大学院生が積極的にその資本となる自己のからだを健康・体力面で向上させておかなければならない。

しかし一方では、スポーツ観戦者やスポーツ指導者と言ったスポーツ活動を通じた社会的貢献を担えるだけの人材を育てることも、大学院体育の目的の一つとして考えられる。そのためにも今後、大学院体育の開設意義を含めた調査等が行われることは、重要であると考えられる。

参考資料

- 1) 中谷敏昭, 他: 筑波大学大学院生の運動能力に関する一考察—一般事務職員との比較—, 大学体育研究, 13: 43-55, 1991.
- 2) 松元 剛: 大学生の体力の年次推移—筑波大学—, 体育の科学, 52: 48-51, 2002.
- 3) 松元 剛: 大学院生向けの体育授業の導入と展開. 筑波フォーラム, 52: 53-56, 2002.

(この研究は体育センター拠出金で行われたものである。)